

気を付けたい病気

文*岩崎雅和先生
(岩崎動物病院)

イラスト*石崎伸子

参考資料*アニコム損害保険株
家庭どうぶつ白書



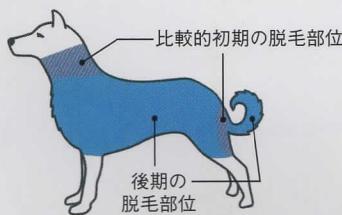
POINT 1—皮膚—

脱毛症X(アロペシアX)

「偽クッシング症候群」とも呼ばれる、脱毛だけが起こる病気。何らかのホルモンがかかわると考えられていますが、原因がはっきりしないことから総称して脱毛症X(アロペシアX)と呼ばれています。

1~3歳ごろに発症し、オスの発症率が高く(去勢・不妊手術の後に発症するタイプも存在)、かゆみを伴わない左右対称の脱毛が頭やしっぽなどから発生し、頭部と足以外の部分に広がる点が特徴です。

皮膚が乾燥することが多く、症例によっては色素沈着、**面皰**(黒いニキビ状の発疹)も認められます。血液検査、内分泌検査、皮膚の病理組織検査などを通じて診断を行います。



対処

原因が特定できていないため、はっきりとした治療方法は確立されていません。しかし、いくつかの治療法(性腺除去、メラトニン投与、成長ホルモン投与など)によって症状が改善されることがあります。ただし、一時的に症状が改善しても再発することがあります。飼い主さんは、この病気は生命を脅かすものではないと認識した上で、治療を行うかどうか選択するようにしましょう。

豊かな被毛を持つポメラニアン。上手にお手入れしてあげるとふっかふかなさわり心地を体験できて、身も心も癒されますよね。

ポメラニアンは、(社)ジャパンケネルクラブの統計によると1999年から2012年にかけてつねに犬種別登録数の上位10位以内に入っており、現在の登録頭数は15,000頭を超えているそう。その愛くるしい容姿もあって、人気を揺るぎないものにしていることは間違いないありません。

今回はそんなポメラニアンの病気について、「アニコム家庭どうぶつ白書」の疾患統計を参考に最新の獣医学的知見を交えて、脱毛症X(アロペシアX)や心疾患、クッシング症候群などとくに多い病気をピックアップしながら学んでいきたいと思います。

1位

皮膚の病気

ポメラニアンには、さまざまな皮膚疾患が認められます。**アレルギー性(アトピー性)皮膚炎**は目の周りや口周りの脱毛が目立つ病気で、皮膚が全体的に赤くなり、多くはかゆみを伴います。**皮膚糸状菌症**(カビの感染)や**膿皮症**(カサブタなどができる)では、頭部や腹部に部分的な脱毛を伴う皮膚の変化が見られます。そのほかにも、**外部寄生虫感染**(ノミやダニの感染)や**脱毛症X(アロペシアX)**などが認められます。

対処

皮膚には「赤み」、「ポツポツ」、「腫れ」、「脱毛」、「固い・柔らかい」程度の症状しか現れず、見た目で原因を特定することは簡単ではありません。3日以上症状が継続するようなら、動物病院に相談してみることをお勧めします。

予防

皮膚の疾患の多くは、なめたり、搔きむしることで悪化します。診療までのあいだはエリザベスカラーを装着すると良いでしょう。

チェック しよう！

ポメラニアンで

2位

消化器の病気

食欲不振、嘔吐、下痢、腹痛など幅広い症状を示します。食べすぎや食事内容の変化だけでなく、細菌やウイルス、寄生虫などの感染症、異物・薬物の摂取や食物アレルギー、腫瘍なども原因となります。元気や食欲の低下を伴う急な下痢や嘔吐が見られる場合は、何かしらの腸炎が疑われます。

対
処

症状を観察した上で、獣医師による正確な診断と治療を受けましょう。吐き気なら3回以上、下痢なら2回以上、また症状が2つ以上見られたら、迷わず動物病院へ。その際、排泄物やその画像を持参すると診断の手助けになります。

予
防

異物誤食や食事の管理、体重管理、消化管内寄生虫の予防的駆除に十分に注意してください。

4位

耳の病気

耳炎が多く、なかでも外耳炎が「好発因子」と「原発因子」によって頻繁に発生します。「好発因子」は、耳の入り口から鼓膜までの耳道の湿度が高くなる「垂れ耳」、「耳毛がびっしり生えている」などの、病気が起きやすい条件。「原発因子」は、寄生虫、腫瘍、基礎疾患（アレルギーやホルモン異常）などの原因です。

立ち耳で耳毛も少なく「好発因子」がほとんどないポメラニアンの多くは、「原発因子」のマラセチア感染症、膿皮症、脂漏症やアレルギー性皮膚炎によって耳炎になります。外耳炎は非常にかゆいため、耳をしきりに搔く、頭を振るといった症状が見られます。放置すると出血や化膿が起こり、痛みを伴うので、さわると嫌がるようになります。

対
処

耳を気にしている、耳垢が溜まっているようなら、すぐに動物病院へ。その際は、アレルギーの有無を調べるためにいつも食べているものを持参したり、思い当たる原因をまとめておいて説明すると診断しやすくなります。

予
防

ふだんから愛犬の耳にニオイや耳垢、赤み、腫れがないかをチェックしてください。耳の中をこすると外耳炎の原因となることもあるので注意。アレルギーの疑いがある場合は、検査をして原因を特定しておくことも有効です。

3位

筋骨格の病気

ポメラニアンは遺伝的に環軸亜脱臼・歯突起形成不全（頸椎の脱臼）や肩関節脱臼、膝蓋骨脱臼、肘関節脱臼、肘関節形成不全などの関節の異常が多いことが知られています。また、骨が細いためか、ソファから飛び下りて骨折するなどの事故も起こりやすいようです。

環軸亜脱臼・歯突起形成不全は、痛みによりふだんとは異なる姿勢でうずくまり、食欲の低下や麻痺、運動障害が見られます。これは1歳以下で診断されることが多いです。肩や前足、膝蓋骨の脱臼は、各関節の先天的要因と滑りやすい床、肥満などの後天的要因によって発症します。愛犬が片足を上げながら走っている場合は、この病気の可能性を疑ってください。

対
処

手術での矯正のほか、痛み止めやサプリメントの投薬が必要になります。すぐに動物病院に行けない場合は、まず安静にしてください。ただし、麻痺をしている場合は一刻も早く動物病院で治療を受ける必要があります。

予
防

事故を防止するために、滑りにくい床材やワックスを利用して床を滑りにくくしてあげください。また、ふだんから愛犬の歩き方に注意し、動物病院で定期的な検査を欠かさずに行なうことが予防につながります。

7位

循環器の病気

ポメラニアンには、ほかの犬種に比べて循環器の病気が多く認められます。なかでも遺伝的に発生する動脈管開存症や洞不全症候群、加齢とともに発生する弁膜症（僧帽弁閉鎖不全症）が知られています。

洞不全症候群はかなり珍しい病気で、心臓を拍動させる伝導系という構造に異常があり、この病気と診断された場合はペースメーカーの使用が必要になります。

また、呼吸がスムーズに行えない体質のコは加齢に伴って心臓への負担も大きくなり、弁膜症になる可能性が高いです。弁膜症とは心臓にある弁（僧帽弁、三尖弁、肺動脈弁、大動脈弁）がそれぞれうまく閉じなくななり、心不全に至る病気です。

対処 心疾患があるコが咳をするのは病気が進んでいるサインですので、早急に動物病院で診察を受けてください。聴診だけでなく、定期的にレントゲン検査や超音波検査、血液検査、心電図検査を実施し、必要な薬を処方してもらいましょう。ふだんは無理のない散歩や、一定の湿度と温度を保つ環境づくり、必要であれば酸素室（レンタル会社から借りるのが一般的）を用意して、愛犬にストレスの少ない生活をさせてあげましょう。

予防 残念ながら予防法はありませんが、定期的な身体検査で病気を早期に発見し、治療を開始することで病気の進行を遅らせ、症状を抑えることが可能です。

5位

目の病気

流涙症（つねに涙があふれている病気）の原因のひとつでもある眼瞼内反（まぶたが内反している病気）や白内障、進行性網膜萎縮などの遺伝性疾患が知られています。また、活発なポメラニアンは目を傷つけたり（角膜損傷）、結膜炎をさらに悪化させたりするケースもしばしば見られます。

対処 白目が赤い、ショボショボしているなどの症状があれば動物病院へ。進行性網膜萎縮は網膜が徐々に萎縮して失明する病気です。詳しい検査をしないとわかりませんので、兆候があつたら一度動物病院へ相談してください。

予防 目の異常では点眼薬が必要となることが多いため、ふだんから目の周りをさわられることに慣らしておくと便利です。

6位

呼吸器の病気

気管の問題で呼吸がしにくく、大きな呼吸音や咳をするポメラニアンを多く見かけます。遺伝的に気管虚脱（気管軟骨の形成不全により、気管がひしゃげて呼吸不全を起こす病気）が起こりやすく、気管の弾力が弱くなる中高齢期にさらに発症しやすくなります。逆くしゃみ（吸引性の咳）と呼ばれる発作もよく見られますが、これはただちに異常を示すものではありませんので、頻繁に見られるようなら動画などにその様子を記録しておいて、動物病院で相談してみてください。

対処 気管虚脱は、まず考えられる環境的要因を排除し、内科的にコントロールを試みた上で、それでも改善できない場合に手術を行います。また、夏は部屋の空気を冷やし、冷たいタオルをのどに当てるなど、興奮して炎症が起らないようにすると良いようです。冬は部屋の湿度を保ち、急激な温度変化を避けるようにします。散歩の際は首輪ではなくウエアと一体型のハーネスなどを付けて、気管への物理的な刺激を抑えましょう。

動脈管開存症

POINT 3—その他

クッシング症候群

内分泌疾患(腫瘍性疾患)のひとつで、高齢のボメラニアンがかかることが多い病気です。この病気は、「コルチゾール」というホルモンが副腎から出すぎることが原因で起こります。水をよく飲む、尿の量や回数が増える、異常な食欲、お腹が膨れる、足腰が弱る、毛が抜ける、息が荒くなるなどの症状が見られ、これらをまとめてクッシング症候群と呼びます。

この病気は2つのタイプに分かれ、脳の下垂体（多くのホルモンを分泌する内分泌器官）の中に腫瘍があって副腎皮質を刺激する命令が異常に出てる場合と、副腎皮質自体の腫瘍が原因の場合があります。慢性化すると**甲状腺機能低下症**や**糖尿病**などを併発し、抵抗力が弱くなつて細菌などに感染することが多くなります。6～10歳の年齢の犬で、オスよりもメスに多く発生します。

診断では、血液検査でコルチゾールを測定したり、超音波検査で副腎の大きさを確認したり、CTやMRIを使った画像診断で下垂体に腫瘍がないかを確認します。

対処

下垂体に腫瘍がある場合は、その腫瘍の大きさによって治療法が異なります。腫瘍が小さいときは、飲み薬で副腎から分泌されるコルチゾールを抑えます。飲み薬でうまく抑えられれば、症状は良くなり、長く生きられます。腫瘍が大きいときは、放射線療法で腫瘍を小さくしてから同様に飲み薬でコルチゾールの分泌を抑えます。腫瘍が大きく、放射線療法を行わなければ、行つても腫瘍が小さくならならない場合は、1～2年以内に認知症のような症状が出ます。また、副腎のガンや腫瘍を手術で完全に摘出できれば症状は消えます。

動脈管開存症は先天性心臓疾患のひとつで、遺伝的な原因で発生することが知られています。

胎児が母犬の胎内にいるあいだ、血液を循環させるために使う動脈管という血管は、犬が母体の外に出て肺循環を始めると必要なくなり、生後数日で閉じるようになっています。まれに胸部大動脈と肺動脈をつなぐ動脈管が閉じない場合があり、そのために本来全身に流れるべき動脈血の一部が肺に流れてしまうことで起こる心疾患が、動脈管開存症です。

この病気を持つワンコは、健康なコに比べて長い時間運動ができず、運動後に咳をしたり、息が切れたりします。症状は年齢を重ねるにつれて重くなり、最終的には心不全になります。珍しい病気ですが、日本ではボメラニアンに多く発症することが知られています（ほかにヨークシャー・テリアやマルチーズなどにも発症の報告があります）。超音波検査などの画像で動脈管を確認して診断します。

対処

開いたままの動脈管を外科手術で閉じるか、カテーテルなどによって動脈管を閉じる治療を行います。治療がうまくいけば症状が治まり、健康なワンコとまったく同じ生活ができるようになります。

